

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005  
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up , TOHOKU !

2015年(平成27年)9月16日 水曜日

無料

## 第40号

毎月発行

創刊2015年(平成27年)9月16日 水曜日



撤去前の石巻魚市場 2012年10月



工事開始 2012年10月

ようやく完成した  
東洋一の石巻魚市場

東日本大震災で被災し再建中の石巻魚市場が完成し、

規模拡大と空調管理の導入で、震災前は年間約千五百万円だった電気代も二〜三倍に膨らむ可能性があるようだ。

## 震災から実に4年半後の復活 9/1から石巻魚市場供用開始 震災前の水揚げを取り戻すか？

秋漁が始まるこの九月一日に本格稼働した。規模は、屋根付き岸壁を備えた三棟で、延べ床面積四万六千平方メートルで、震災前の一・四倍。水産物の海外輸出に対応できるような高度衛生管理を導入した最新鋭の施設に生まれ変わるというが、運営経費の増加が大きな課題となっている。施設の延長は「日本一」と言われた震災前の六百五十メートルを上回る東西八百七十六メートルで「東洋一」になるようだ。建設費補助の条件で、石巻魚市場の総事業費百九十二億円は国が負担する。規模拡大と空調管理の導入で、震災前は年間約千五百万円だった電気代も二〜三倍に膨らむ可能性があるようだ。

戻るか、水揚げ量？

今後新たな付加価値をどう構築するか？

昨年の水揚げは数量で震災前の七割、金額で九割まで回復したという。施設完成で受け入れ機能は整うが、水産加工業者により大幅に増えるとは考えにくいという。それにしても、施設が震災前よりも大きくなったとはいえ、全面再開までに四年半以上も経過したこと負担は大きいだろう。震災直後から、石巻ほどの大きさを持たない他の魚市場へ水揚げを変更する漁業者が増加したというのはたびたび耳にしている。そうした漁業者が再び石巻魚市場に戻ってくるのだろうか。まずはそこが第一の課題であろう。

いまではすっかり忘れ去られ、震災直後から言われてきたことを再度思い出してみたい。それは、復興は震災前の状態に戻すのではなく、新ビジョンのもとに、時代を先取りした復興を目指すということであった。石巻魚市場は、この目標に照らしたらどうか。言うは易く、行うのはむずかしいのは百も承知であるが、もともと日本漁業が抱え込んでいた、消費者の魚離れ、市場の長期低迷、高齢化などの諸課題を、この石巻魚市場は超克できるだろうか。こうした諸課題が重くのしかかった全面再開であることは確かである。

東日本大震災で壊滅的な被害を受けた石巻魚市場の復旧工事が完了し、1日から全面供用を始めた。震災から4年半を前に高度衛生管理型施設として待望の完全復旧を果たした「魚のまち石巻」の象徴。市場関係者はその門出を三本締めなどで祝った。石巻市と魚市場では今月26日に完成式典を開き、完全復活を内外に伝える。

同魚市場は震災後、4カ月間の休止を余儀なくされたが、平成23年7月に仮施設で水揚げを再開した。改修事業の着手は25年8月で、仮施設と併用しながら完成部分から順次供用を開始。今年8月に最後まで残っていた西棟と中央棟の一部が完成し、全面供用へとこぎつけた。

新荷さばき施設は鉄骨造一部4階建てで延床面積約4万6千平方メートル。西、東、中央棟の3棟で、漁業種別にゾーン分けし、水揚げから出荷までの動線をそれぞれに確保した。これによって岸壁沿いに延びた上屋は876メートルと直線距離では東洋一という長さ。旧施設と比べ約1.4倍となっている。建設の総事業費は約192億円で、国の補助金が充てられた。

新施設の最大の特徴は高度衛生管理の世界基準HACCP(ハサップ)対応であること。風雨や鳥の侵入などを防ぐ密閉型構造や入棟者のID管理などのほか、荷さばき場入口のサニタリールームは手指殺菌をしなければ開扉しない仕組み。食の安全性向上による高付加価値化や、海外輸出での販路拡大での「国際水産都市石巻」を目指す。

事務所機能は西棟の一部と合築された3階建ての管理棟に移行。学習、交流の場としての役割もあり、2階の見学通路からは1階の荷さばき施設での業務が見学可能。展示コーナーは写真やタッチパネルが設置され、石巻の水産業について学べる。

1日朝の競り前に行われたセレモニーには、買受人ら100人以上が参加。市場開設者である石巻市の亀山紘市長が「行政と魚市場が一体となり石巻の復興を世界にPRし、漁船誘致や原魚確保に努める」とあいさつ。同魚市場の須能邦雄社長は地域の水産業者で約5万トンに及ぶ在庫処理を行った震災直後からこれまでを振り返り、「今日で開場65年。魚市場は皆さんの総力で立ち上がることができた」と感謝を込めた。

ハサップ認定には電動フォークリフトの整備や、生産者や買受人への利用法の周知、市場職員によるコンピューター管理などクリアすべき点は多い。この日も販売情報を新設置のモニターに映し出して入札を行ったが、市場職員は多少操作に慣れない様子。競りに参加した買受人の1人は「利用法は慣れていくしかないが、何にせよ新施設の完成は喜ばしい」と話していた。市場では高度衛生管理型運用の完全導入目標を来年9月に設定。可能な部分から導入し、浸透を図っていく。

同魚市場の水揚げは震災前の22年に比べ、23年は数量・金額ともに2割ほどに落ち込んだが、施設の復旧に比例し、昨年は数量で7割、金額では9割ほどにまで回復。市場背後地の水産加工業者は再開が7割ほどであり、全面供用開始によるこれらへの好影響が期待されている。

## hibi-net

### 石巻日日新聞記事(9/1)より

## 『石巻魚市場供用開始 震災から4年半 完全復活』



【写真】1日から全面供用を開始した石巻魚市場の新施設

## 福島一富岡町・楢葉町レポート ②

### 楢葉町、9/5の避難指示解除ですぐにも帰還が可能だというが、本当に帰れるのか？ 住めるのか？生活出来るのか？

#### 【現地取材の連載レポート その②】

#### 楢葉町は避難指示解除

大手新聞社のニュースによれば、政府の原子力災害対策本部(本部長・安倍晋三首相)は九月五日午前零時、東京電力福島第一原発事故で全域避難となった福島県楢葉町の避難指示を解除したとのことだった。その根拠として国は「年間被ばく量が帰還の目安の20ミリシーベルトを下回る事が確実に成った」として、町や住民らとの協議を経て、解除を決定したとのことである。

#### 帰還希望調査では？

一方、放射線への不安や病院などの生活基盤の不備などから、すぐに帰還する住民は約七三〇〇人のうち一割に満たないとみられ、町再生への道のりは険しいとのことだった。復興庁が昨年十月実施した帰還意向調査では、「すぐに戻る」「条件が整えば戻る」と答えた町民は四十六パーセントで、うち帰還時期を避難指示解除から「一年以内」と答えた人は

国は今後、楢葉町を拠点に沿岸部に広がる避難指示区域の除染やインフラ整備を進めるといふ。

は三十七パーセントだった。しかし、今年四月に始まった「準備宿泊」に登録した町民は約七八〇人にとどまった。

町の北端に位置する。大熊町の南は、前号で取り上げた富岡町である。この富岡町は現在、除染作業の真っ最中であり、町内のあちこちに除染作業で削られた土壌等を詰め込んだ大きな黒色の袋が山のように積み上げられている。当然、この町に人は住めない。放射線量が高いからである。この富岡町の南にあるのが楢葉町である。

#### 楢葉町の位置と状況

楢葉町は、前号で取り上げた富岡町の南側に位置する。福島第一原発を基点に位置関係を整理すると次のようになる。福島第一原発は、福島県東部の太平洋沿岸部の大熊

#### 町の生の声

今回の取材で、若干名だ

が、避難民の生の声を聞いている。それによれば、線量が低くなったからといって、すぐに戻るには様々な課題があり、そう簡単ではない。特に仕事である。当然ながら、楢葉に仕事がないと戻れない。他にも、帰還する人が少なければ住むには怖いし、犯罪も多い、病院も建設はこれからというし、学校再開もこれから、店も住人が少なければ再開しないし、生活する上での不便は覚悟しなければならぬ。もっと生活者目線で政策を出して欲しい、と。至極もつともな話である。筆者はさらに突っ込んで聞いたところ、次のような本音が飛び出す。

#### 広野町の火力発電所の煙突

楢葉町のさらに南に隣接する広野町には火力発電所がある。その二本の煙突が、なぜ原発という人類には制御不能の技術に無謀にも突進せずに、火力まで止まらなかったのかと問いかけているようにも見える。結果的には皮肉たっぶりの風景と



楢葉町役場と【ここなら商店街】



楢葉町コミュニティーセンター



ホームセンターに駐車する工事関係車両



広野町の火力発電所入り口看板



広野町の火力発電所の煙突

なっている。 — 続 —

**東北地酒の季節到来!**  
過去の地酒ラインナップ紹介



6/11 日本橋開催



12/18 日本橋開催



4/10 日本橋開催



7/11 渋谷開催



5/16 渋谷開催



2/12 日本橋開催



「イワシのフライ」(完成)

**第13回 水産業再興のための料理レシピ紹介**

**【イワシのフライ】**

暑い夏も、長雨も終わり、急に涼しい秋となりました。そこで、プリツとした新鮮なイワシのフライも良いですね。揚げたてのサクサクフライでビールもよし、日本酒もよしです!!



郷土料理愛好家  
松本由美子氏

**【イワシのフライ】**

秋は、脂ののったプリツとしたイワシのフライをおすすめします。

**--- 作り方 ---**

- ① イワシを指で中骨をとり、手開きをします。
- ② 開いたら、骨のある腹筋を包丁で削ぎます。
- ③ イワシを洗い、水気を取り塩、コショウをします。
- ④ 小麦粉をはたき、溶き卵をくぐらせてパン粉をつけたら、揚げ油でカラッと揚げます。(170~180℃) サクサクをいただきます。



イワシを開いたところ



新鮮なイワシ

# 若の里が貫いた 相撲道

## 若の里という力士

今回のテーマは「若の里」である。と言ってもこの若の里、決して派手さはなかった。相撲好き以外にはあまり知られていないかもしれない。青森県弘前市出身の39歳。7月の名古屋場所を終えた後、引退した。青森は東北きつての「相撲王国」である。先代の横綱若乃花、大関貴ノ花を始め、若の里の師匠でもあった横綱隆の里、横綱旭富士、大関貴ノ浪、舞の海、安美錦、高見盛など、戦後だけでも実に43人の幕内力士を輩出している。

大相撲の平均引退年齢は31・8歳。若の里のように39歳まで関取でいられた人は本場に少ない。同じく名古屋場所を最後に引退したモンゴル出身の旭天鵬は40歳。30代後半になっても現役で相撲を取り続けたこの

2人は角界の「レジェンド」と呼ばれた。

若の里と同じ昭和51年生まれ力士としては、千代大海、栃東、琴光喜の3人の大関や人気力士だった高見盛がいて、「花のゴーイチ組」と呼ばれていたが、若の里はその最後まで残った現役力士でもあった。

この若の里、多くの人が「お相撲さん」と言われて思い浮かぶ姿かたちが一番近い身体をした力士だったと思う。特に上半身の首から肩までの盛り上がった筋肉は見事で、彼の「力」を

実感させた。事実、角界きつての「怪力」として知られ、真つ向勝負で横綱や大関を破ることもたびたびだった。その中には、白鵬が横綱になる前からのカウントであるものの、前人未踏の対白鵬戦6連勝もある。その白鵬も、優勝した名古屋場所千秋楽の翌日の会見で、若の里のことを「大好きで、憧れの人がだった」と評した。

きで、憧れの人がだった」と評した。

若の里、優勝こそなかったが準優勝は2度、十両優勝も4度、殊勲賞、敢闘賞はともに4度、技能賞も2度あり、金星は2個挙げた。通算1691回出場は長い大相撲の歴史の中でも歴代5位、通算914勝(783敗124休)は同じく7位。幕内在位87場所は同じく8位であった。昭和以降最長の連続19場所三役を務めるなど、三役在位は合計26場所にも及び、たびたび大関候補として期待されたが、残念ながら大関には届かなかった。しかし、間違いなく「名闘協」であった。

## 怪我からの復活

大関に届かなかったその大きな理由は度重なった怪我であった。常に真正面からの勝負を貫き、どんな場面でも決して力を抜くことがなかったこと、代償が、度々大きな怪我に見舞われ、怪我の手術は力士人生の中で実に10回にも及んだ。にもかかわらず、その度に復活を遂げ、そして39歳まで関取でいた若の里のことを、人は皆「鉄人」と呼んだ。

若の里は引退会見でこう言っている。「怪我さえなければという気持ちもありますが、怪我があったから、ここまでできたのかなと思います」この言葉、本当に正直な思いだったと思う。確かに

怪我がなければもっと相撲を続けていられたかもしれない。しかし、その怪我をその度に乗り越えてきたからこそ、今の若の里があったとも言えるわけである。

現役最後の場所となった名古屋場所では、特に両ひざの状況が悪く、歩くのすらやつという状況だったそうだが、それでも15日間で4つ白星を重ねた。まさに気迫だけでも取った最後の白星だった。仮に、立ち合いで変化するなどしてあと2つ、勝ちを拾えれば十両にも残留でき、引退はしないで済んだ。しかし、若の里は最後までそうした相撲を取らなかった。それが自分の目指す相撲でないことを誰よりも知っていて、それを貫いたのである。

## 「土俵人生に悔いなし」

角界に入門して初土俵は平成4年3月。そこから実に23年半に及ぶ相撲人生であった。引退会見でそれを振り返って若の里は、「毎日、本場所中は命がけで土俵に上がっていました。それだけは、貫いてきた」と言い切った。「命がけで」という言葉は軽々に出てくる言葉ではない。この人は本当に本物の力士だったのだと思っただい。

朴訥と語るその語り口に、生粋の東北人の姿を見た人も多いのではないかと思う。土俵上での真剣な眼差しと、土俵の外で見せる相手

を和ますような笑顔とのギャップも印象的で、彼の人柄が表れているように思っただい。「強くて優しいお相撲さん」だった。

土俵上では決して感情を顕わにしなかった。派手なパフォーマンスもなかった。「勝つておごらず、負けて悔しがらず」が信条だったのは「相手に失礼」だからで、喜びも悔しさも我慢するように自らを戒めてきたそうである。この辺りにも東北人らしさを感じる。

若の里はまた、「ずっと現役でいたかったが、悔いは全くない」と言い切った。この言葉、相撲への愛着と、やり切った人だけが言える清々しさを感じた。

## 突然襲った悲劇

先述のように、7月の名古屋場所後には旭天鵬も引退を表明した。旭天鵬と若の里は実は同期入門だった。同じ時に入門した二人が同時に引退するというのも、実に不思議な縁である。しかし、意外にも二人は一緒に食事をしたり飲んだりすることもなく、電話やメールもしたことがなく、場所中に一言二言言葉を交わすだけの間柄だったそうである。しかし、それだけできつと互に通じるものがあったに違いない。そこに

は数々の苦難をその都度乗り越えて、人一倍長く土俵に上がり続けてきた者同士が分かり合えるものがあったのだらう。



たのだらう。

その旭天鵬が名古屋場所の千秋楽を終えて早々に引退を表明したのに対して、若の里はなかなか引退を表明しなかった。その理由は名古屋場所後に行われる夏巡業に参加したかったということだったらしい。この巡業、若の里の故郷である青森でも2日間開催されることになっていった。現役力士として最後に故郷の土を踏んで土俵人生を終えたかったのに違いない。

「東北の人は普段、相撲を生で見られないこともあって本当に巡業を楽しみにしているし、自分もずっと楽しみにしていた」と、若の里は語った。若の里自身、角界入りを決めたのは青森で行われた巡業で貴乃花(当時貴花田)に稽古をつけてもらったことだったというので、巡業に対しては格別の思い入れがあったのだらう。

ところが、引退表明をせざる、夏巡業に参加できなかったのだらう。

## 若の里の思いを 受け継ぐ者

引退会見で若の里は、「今

の悲劇が襲った。巡業の真ただ中で若の里のお父さんが心筋梗塞で急逝したのである。青森県内での巡業を2日後に控えた8月17日のことだった。

しかし若の里は、翌18日の秋田での巡業にもそのまま参加し、その終了後に弘前の実家に帰ってお父さんと無言の対面をし、その後すぐ巡業の一行に合流。19日と行われた青森県内での巡業に最後まで参加した。横綱白鵬の言葉が何よりの手向けだったらう。

「オヤジさんが亡くなって(巡業を)やめてもいいと思っただけで、最後まで参加した。素晴らしいプロ意識を見せてもらった。見本となる存在というのは、最後の最後まで自分の行動で示してくれませぬ」と。

若の里と同様、中学卒業と同時に角界の扉を叩いた、文字通り「叩き上げ」の力士である。今年で21歳、土俵生活23年半の若の里が入門した時にはまだ生まれもいかなかった「輝」だが、若の里の付け人を2年務めたその間、若の里の相撲に取り組む真摯な姿勢に心酔し、貫き通したその「相撲道」を間近で見とっさり受け継いだようである。

若の里はこの輝のことを、「本当に純粋で無垢というかね。寡黙なタイプだし、まったくチャラチャラしたところがないでしょ」と評している。そして、「あとは頼む、という感じですよ」とも言っている。若の里がこの若い力士に掛ける期待の大きさが窺えると共に、自らに共通するものを感じて後を託した様子が如実に表れた言葉である。この輝、東北出身でこそないが、確かに若の里と同じく相撲に対する一途な姿勢が感じられる。

写真は日本相撲協会のサイトにある若の里の写真である。この若の里がいなくなった来場所の土俵はとも寂しくなるが、若の里の思いを受け継ぐ輝の相撲ぶりに注目してみたいと思う。そしてまた、若の里と同じ青森の出身、若の里の2歳年下でかつ、今も現役を続ける安美錦にも改めて注目したい。

## 執筆者紹介

大友浩平

(おおともこうへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブログ」  
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



きで、憧れの人がだった」と評した。

怪我がなければもっと相撲を続けていられたかもしれない。しかし、その怪我をその度に乗り越えてきたからこそ、今の若の里があったとも言えるわけである。

現役最後の場所となった名古屋場所では、特に両ひざの状況が悪く、歩くのすらやつという状況だったそうだが、それでも15日間で4つ白星を重ねた。まさに気迫だけでも取った最後の白星だった。仮に、立ち合いで変化するなどしてあと2つ、勝ちを拾えれば十両にも残留でき、引退はしないで済んだ。しかし、若の里は最後までそうした相撲を取らなかった。それが自分の目指す相撲でないことを誰よりも知っていて、それを貫いたのである。

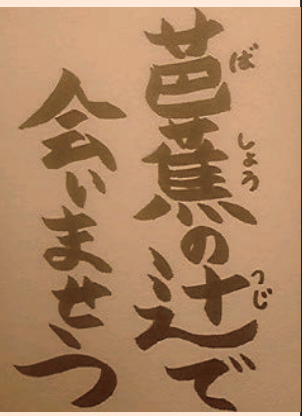
先述のように、7月の名古屋場所後には旭天鵬も引退を表明した。旭天鵬と若の里は実は同期入門だった。同じ時に入門した二人が同時に引退するというのも、実に不思議な縁である。しかし、意外にも二人は一緒に食事をしたり飲んだりすることもなく、電話やメールもしたことがなく、場所中に一言二言言葉を交わすだけの間柄だったそうである。しかし、それだけできつと互に通じるものがあったに違いない。そこに

は数々の苦難をその都度乗り越えて、人一倍長く土俵に上がり続けてきた者同士が分かり合えるものがあったのだらう。

若の里はこの輝のことを、「本当に純粋で無垢というかね。寡黙なタイプだし、まったくチャラチャラしたところがないでしょ」と評している。そして、「あとは頼む、という感じですよ」とも言っている。若の里がこの若い力士に掛ける期待の大きさが窺えると共に、自らに共通するものを感じて後を託した様子が如実に表れた言葉である。この輝、東北出身でこそないが、確かに若の里と同じく相撲に対する一途な姿勢が感じられる。

写真は日本相撲協会のサイトにある若の里の写真である。この若の里がいなくなった来場所の土俵はとも寂しくなるが、若の里の思いを受け継ぐ輝の相撲ぶりに注目してみたいと思う。そしてまた、若の里と同じ青森の出身、若の里の2歳年下でかつ、今も現役を続ける安美錦にも改めて注目したい。

連載  
むかしばなし



第二十八話  
名取大北進

「賢治さん、夜明けですな」

気がつく、宮澤賢治は自分が佐々木喜善と二人で随分な巨人になって、夜明けの光を照り返す雲を山高帽で掻き分けているのがわかった。随分、白熱して話し込んだものだ。互いの信仰の話が始まって、人類の未来の話、宇宙の構造の話。自分達が見ている怪異や霊も、科学と無関係ではない事。そして再び、信仰と今後の生き方について人と共通の話題で盛り上がる事は大きな喜びだが、このような内容を他人に包



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出演し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当

み隠さず語った事などあったらどうか。この喜善という人、驚くべき事に悉く理解してしまう。この感覚を共有できる人物が、他ならぬイーハトーヴに存在したとは。・

まるで岩手山に登った時に見る夜明けだが、もしかすると今の自分の目線は、あの山頂よりも高いのだ。一体、この巨人化の意味は何でしょうか。

喜善が呟くように問うた。「大天狗殿がその力を誇示するためか。それとも、私も二人が内包する何らかの内面的要因か。」

「精神的な問題ですか。自意識が大きい、とか。ともあれ、夜が明けてもこのままですと、我々は歴史に残ってしまいますな。賢治さん。」

「いや、おそらく何らかの作用で忘れ去られるでしょう。仙臺には巨人伝承のようなものがありますか。」

「ああ、そういうえば太白山や、北の伊勢堂山にあるようです。詳細は今後の宿題ですが。」

「なるほど、そういう形で人々の記憶に残るのでしょうか。喜善さん。」

どこまでも暢気であるが、東光の照らす南方の名取平野のその向こうには、大地を埋め尽くすように広がる穏やかならぬ黒い軍隊の群れが見えるのだ。

「頼朝ですな。」

「ええ。遂に来ますな。」

ふと、気づくと目の高さにあつた雲が、少し上の方へ上がっている。

「あつ喜善さん、私どもは縮み始めています。」

「むむ、いけませんな。もう少し頼朝を脅かしてやらぬと。」

ふざけ半分と言うと、少し雲は目の高さに近づいた。これはもしや。・

「我々が対話している間は、巨人化が続くという訳ですか。」

「ふむふむ。」

喜善が顎を指で掻き、首を振りながらも微笑する。「北方民族の伝える石が、どこか異界に繋がる力を持つている可能性を知ったから。・ではないですか。」

「異界に繋がる力。・」

「つまり、妹さんに会えるかも知れない、という事。」

ほんの五年と少し前、わずか二十四歳で、兄の目の前で病没した、妹・トシ子。賢治は南への視線を北の故郷・北上高地へ回し、その先を遙かに見渡した。

「なぜ俺は、もはや東京ではなく、極北サガレンを求めたのだろうか。・」

石川善助は、向山下の野営場での夜明けの焚き火越しに、二人の巨人の姿を眺めていた。泉三郎・忠衡が側に座り、火に当たる。

「間もなく、頼朝が進軍を始める。・俺はこの広瀬川で戦い、果てる覚悟だ。」

「三郎君。せつかく生き延びたのだから、死に急いだらいけない。」

「俺は大天狗綾糟の子。綾糟の土地を守るのは、俺。広瀬川の龍を操れるのも、他ならぬ俺だ。」

「そうか。・いづれにせよ、会えるはずのない互いが、こうして友となれただけでも、ご縁の神に感謝だ。だがそれならばそれで、別れ際に話しておかねばならない。・トヨの事を。」

「そうだ。伊勢堂山で会った、と言っていたな。」

「実はな、もっと昔に、一度会っているのだよ。・」

「トヨを見たのね。・」

母の泣き顔が、何やら怖ろしげに、記憶の中で響く。

僕は、その膝で泣いていた。ほんの、四、五歳の頃だ。・家の中で、ふと見た怪異に、慄いていたのだ。

僕があつた時、母に話してしまつたから。」

「そんな。・馬鹿な。」

「以来僕は、ずっと街の外に、トヨの顔を捜し続けていたのだ。僕は訊きたかっただけだ。君は一体何者で、なぜ僕の家を出て行ってしまったのか。それは僕のせいだったのか。そしてようやく、伊勢堂山の林間学校で講師をしていた彼女を発見した。間違ひなかった。」

忠衡は固唾を飲んだ。善助の語るトヨは、本当に自分が知る、あのトヨなのか。「幼い頃、会わなかつたかとまず問うたが、二十年も経っていて初対面同然。・無理もないと思つた。ところが、彼女は答えたのだ。少しの間、菅喜と呼ばれる小間物屋に身を寄せた事があつたと！」

善助は不自由な方の脚を掌で叩いてみせる。

「つまり、トヨは妖怪でも何でもなく、目の前に労働しているれつきとした人間の女性だとわかつたのだ。・しかし。」

「・しかし？」

「彼女は、奇妙な事を言つた。僕の家に、厄介になるべきではなかつた。・と。」

忠衡の身が、何かに反応したようにビクリと動いた。

「何か、心当たりがあるか？三郎くん。」

「厄介になるべきではなかつた。・そうだ。トヨ殿は、口癖のように言っていた。この国が、奥羽の国があまりに美しく、つい長く居座り過ぎた。・と。」

「止まれ！全軍、馬を止め、降りさせよ。降りぬ者は槍で突いても馬から降ろせ。」

頼朝が突然号令を発し、周囲を固める武装の家臣団は目を見合わせた。

早朝、白石川沿いに逗留していた十万の大軍団が一斉に北を目指した。まだ陽は高くなつていない。

昨日、偵察隊が名取の西高館に敵の砦ありと確認した為、二万の軍団を割いて向かわせる事になつていたが、頼朝は自ら本隊筋である奥大道をはずれて高館方面へ馬を進めた。そして名取の地へ入つて間もなく、それは見えてきたのだ。

「あれが。笠島の道祖様」

「これより、この右兵衛権佐頼朝、この先を牛耳る賊主にして我が累代の家臣、藤原が裔・泰衡を討伐する為に罷り通る事、何卒お許し頂きたき義是有り」

「許さぬといつても、これだけの寄せ集めを引率しながら、今更引き返せまいな」

一同驚愕の中、社殿の背後から体格のいい大柄な美女が現れた。歳は三十前後と見え、鎧と槍を身に着けているが、その下は巫女のような顔もある。

「おつとさわめく男たちを一喝すると、頼朝はやや上段に立つ女を見上げてしばし視線を交わした。」

「独りで闘うおつもりか。」

「勝てまいな。貴殿より後方三百人は一瞬で炭にできるが、それ以上は無理だ」

「家臣らがぎよつとして一斉に後ずさる。」

「ただし。・通りたければ、そちらの荒くれ雷神を、置いていけ。力試しをしたいから、ここから東にある古代王の墓丘に來いと言え。後は見逃してくれよう。」

「何と言う事だ。・兄。悪源太義平が女の雷神に打ち退かれたというのか？」

「この先、待つ者は」

「私などより怖ろしい女が待ち構えているぞ。覚悟して臨め、あつま男ども。」

空は秋晴れで、雷神悪源太の影はどこにも見えない。

仕方なく奥大道へ戻り、本流の行軍を続ける。二万の分隊が、西の高館を早々に片付けてくれるだろう。・ところが、名取の平原をいくら駆けても駆けても、川に行き当たらない。前方からの風が急に強くなつてきて、もう昼時だというのに霧が押し寄せてくる。

「いや違う、この錆びたような銅さ、土煙だ。」

あつという間に大軍は煙の塊に飲み込まれ、屈強の武人や、馬の多くが息を詰まらせ混乱が始まつた。

「ぬっ！糞、うろたえるな、布を口に巻け！馬を降りて押さえよ。やり過ぎすのだ」

頼朝もまた、馬をなだめ、押さえ込んだ。これは何だ。・あの女の祟りか？

一刻ほど経つて風は止んだが、空はいつまでもどんよりと赤く、方角も何もわからなくなつていった。

しばらくして、伝令の騎馬が駆けてきた事で西南の方角が大まかにわかつた。

「報告！高館への攻略、苦戦中。二万のうち五千騎が、消えました！！」

「次回予告」

阿津賀志山を遙かに凌ぐ、まさかの戦線異常だらけか！そして悪源太は、年上性？の雷神とのデートを蹴るのか、受けるのか！？

空は秋晴れで、雷神悪源太の影はどこにも見えない。



# シリーズ 遠野の自然 「遠野の白露」 遠野 1000 景より



ヤマシャクヤク

今年は天候の変化がまことに激しく、とても季節の変化を楽しむ余裕など感じられなかった。  
冷夏かと思えば、いきなり猛暑になったり、今度は一転して、雨被害、洪水被害が頻発し、大変苦しんだ地域もあった。

こうした変化のせいで体調が狂った人も多かったことだろう。  
さらには、日本のあちこちで火山性の地震が頻発し、なかには実際に小噴火もあった。  
またこれからも、どこかの火山が噴火するかもしれないという不安におびえている。  
こうした目に見える変化から類推すると、ひよっとしたら日本を囲む自然環境が大きく変化しているのではないかと、今後はさらに激変に見舞われるのではないかと、思う人も多いだろう。  
自然の運行とは、通常はこうした予想もつかぬものであり、いつも人間に都合に合わせておらず、人間の思惑を超越したのもかもしれない。

しかし、穏やかな運行が続くと、それがあたりまえのように思い込み、大きな変化が到来するとみな驚き、不安に襲われる。  
\*

九月八日近辺は、二十四節気という「白露」である。二週間もすれば秋分であるが、そこにはまだ少し早い時節。大気が冷えてきて露が出来る頃をいう。  
\*

遠野では、短い夏をやり過ぎ、初秋の気配が押し寄せてくる。草花も秋のものに変わる。  
ヤマシャクヤクやヤマモモのように実を結ぶ植物も出始める。ヤマシャクヤクの実が初めて見るが、野道を歩いて出くわしたら、きっと驚くことだろう。

サワギキョウやミズアオイなどの、青や紫色の花は高貴な光を放つ。初秋ゆえの美しさである。  
花ではないが、夏の終わりの花火もきれいだ。去り行く夏を惜しむように、華々しく咲き、そして散る。

夏の終わりの祭りもいい。鎮守の森の中で踊るこの写真の様子は、人里離れた深い森のなかの別世界のように見える。  
最後は、樹齢も定かではない櫻の巨木。天然記念物とのことだが、それよりも森の神さまに見える。  
\*

遠野の初秋は短く、ものがなしい。  
\*



花火



サワギキョウ



鎮守の祭り



ミズアオイ



ヤマモモ (ズンペ)



巨木

# みやぎ移住・定住推進県民会議の発足 そして石巻・日和キッチン から考える明日の宮城

## 佐藤紀彦

### 佐藤紀彦氏紹介

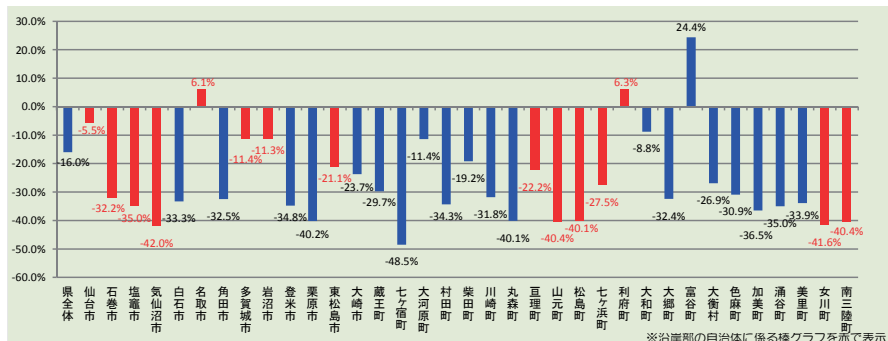
仙台市在住。不動産鑑定士。出身は東北の田園地帯・涌谷町。趣味は家内との温泉巡り。非寛容・排他主義がはびこる時勢を憂う。

Facebook  
https://www.facebook.com/norihiko.sato.509



二〇一〇年までに、全国の約半数の自治体に消滅可能性があることを示した日本創生会議の「増田レポート」。これを受け、昨年9月、政府内に「まち・ひと・しごと創生本部」が設置され、閣連法も成立して「地方創生」の旗が高々と掲げられたが、経済政策では優勝劣敗の「新自由主義」を標榜する現政権が導く官制運動に対し、批判的視点を忘れては、足下がすくわれそう

今年八月末、他県から宮城県への移住を促すことを目的とした官民連携組織「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は



宮城県内各市町村の人口増減率予測(2010年→2040年)

危険的水準にある。宮城県の人口は、二〇一〇年に約二三五万人であったが、何も施策を講じなかった場合、五〇年間で三三%減少し、一五七万人まで落ち込む見通しである(数値は何れも国立社会保障・人口問題研究所の推計を基に県が独自試算したもの)。また、その推計人口の内訳を見た場合、六五歳以上の人口が占める高齢化率が、県全体で四〇%を超える一方、生産年齢人口は半減して七八万人、十五歳以下の年少人口は五五%減少し、一四万人弱の水準に落ち込むことになる。まさに、統計予測だけを見るならば、本格的な人口減少社会の到来を前に、我々は立ち竦むしかない状況のように思える。

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は



日和キッチン外観 築100年の建物を改装したとのこと



天野さん調理風景 本人の許可を得て撮影しました

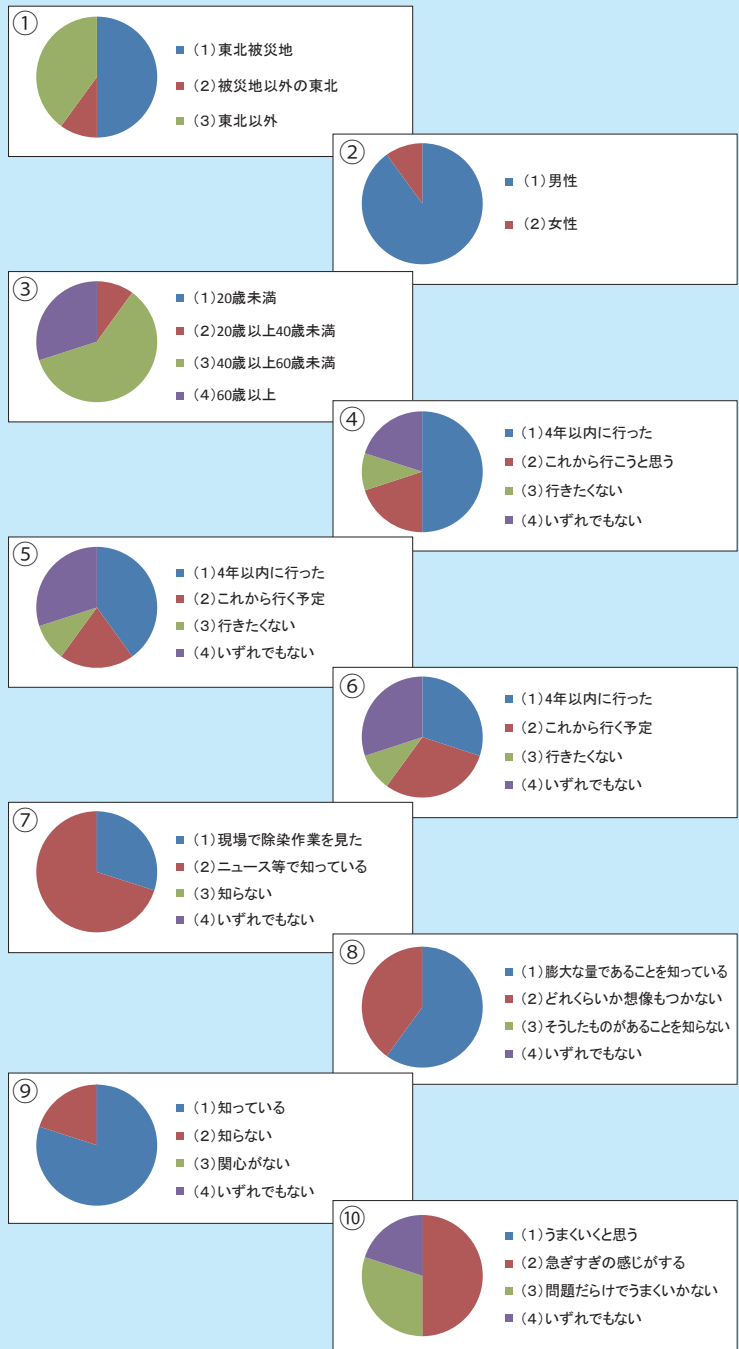
「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

「みやぎ移住・定住推進県民会議」のキックオフ会議が開催され、私も所属する業界団体を代表して出席してきた。自治体関係者や企業・NPO法人関係者等約一三〇団体・二〇〇名が集り、熱意を感じた。おそろく考え抜かれたものなのである。移住検討者向けのキヤッチコピー「ちようどい、宮城県」は、やや微妙な印象であった。しかし何より、このような県民会議を立ち上げざるを得ないほどまでに、現状は

## 第39号 ネットアンケート集計結果

### 【福島の富岡町と楡葉町について】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	5
	(2) 被災地以外の東北	1
②	性別	
	(1) 男性	9
	(2) 女性	1
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	1
	(3) 40歳以上60歳未満	6
④	福島県沿岸部に行ったことがあるか?	
	(1) 4年以内に行った	5
	(2) これから行こうと思う	2
	(3) 行きたくない	1
⑤	富岡町に行ったことがあるか?	
	(1) 4年以内に行った	4
	(2) これから行く予定	2
	(3) 行きたくない	1
⑥	楡葉町に行ったことがあるか?	
	(1) 4年以内に行った	3
	(2) これから行く予定	3
	(3) 行きたくない	1
⑦	富岡町の除染作業を知っているか?	
	(1) 現場で除染作業を見た	3
	(2) ニュース等で知っている	7
	(3) 知らない	0
⑧	富岡町の除染で発生した除去土壌の量について	
	(1) 膨大な量であることを知っている	6
	(2) どれくらいか想像もつかない	4
	(3) そうしたものがあることを知らない	0
⑨	楡葉町の避難指示解除(9/5)を知っているか?	
	(1) 知っている	8
	(2) 知らない	2
	(3) 関心がない	0
⑩	楡葉町の避難指示解除(9/5)はどうか?	
	(1) うまくいくと思う	0
	(2) 急ぎすぎの感じがする	5
	(3) 問題だらけでうまくいかない	3
	(4) いずれでもない	2



今回は【福島の富岡町と楡葉町について】。前回の福島取材に関連してのテーマ。非常に重苦しいテーマではあるが、福島原発被害地に押し込めて良い問題ではないし、国民として目をそむけてはならない問題であるので取り上げた。回答者は非常に少なく10名。「福島県沿岸部に行ったことがあるか?」は「4年以内に行った」が50%。「富岡町に行ったことがあるか?」は「4年以内に行った」が40%。「これから行く予定」が20%。「楡葉町に行ったことがあるか?」は「4年以内に行った」と「これから行く予定」が同数で30%。「富岡町の除染作業を知っているか?」は「ニュース等で知っている」が70%、「現場で除染作業を見た」が30%。「富岡町の除染で発生した除去土壌の量について」は「膨大な量であることを知っている」が60%、「どれくらいか想像もつかない」が40%。「富岡町の除染指示解除(9/5)を知っているか?」は「知っている」が80%、「知らない」が20%。「楡葉町の避難指示解除(9/5)はどうか?」は「急ぎすぎの感じがする」が50%、「問題だらけでうまくいかない」が30%という結果だった。

回答結果について予想を大きく裏切った項目はないが、やはり回答者が少ないことが別の大きな問題ではないかと感じた。

### 編集後記

最近の天候は、穏やかな四季の枠を大きくはみ出し、人々を恐怖に陥れました。特に最近の一月ほどは天候の変化には皆が面喰っているように思います。当初、夏は冷夏予想でしたが、予想を大きく外し、記録的な猛暑となりました。そして、猛暑が終わると台風と長雨で、あちこちで水害に見舞われました。東北大震災での津波も想定外と言われ、甚大な被害を出しましたが、今回も堤防が決壊するなど誰もが予想しないような規模の集中豪雨に襲われました。しかし、自然災害にはそもそも想定範囲というものがあるのでしょうか。日本列島誕生以来、この国はたくさんさんの自然災害に襲われましたが、その都度、自然の力は人間の都合などお構いなしで、圧倒的で、人間はその力を予測するさえできないことを学んできたのではないのでしょうか。いつの頃からか、自然を克服できると思いを違えたり、完全に自然災害を防御できると思いきや、思わぬところで自然の力が発揮されてくる。いまこそ自然の予兆に全神経を鋭敏にして、あらゆる事態に備えるという姿勢を取り戻すべきではないでしょうか。それは自然克服対策中心ではなく、予兆と災害の歴史研究と迅速な避難が中心だと思っております。

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ 〆切はとくに設けません

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先  
(郵送) 〒207-0005 東京都東大和市高木3-315-1 ホームタウン宮前2-2 電子タブloid新聞【東北復興】宛  
(メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています